

住民たちが挑む 「孤独死」ゼロへの取り組み

「一人一命(ひとりいちめい)運動」にとりくむ
NPO法人人と人をつなぐ会

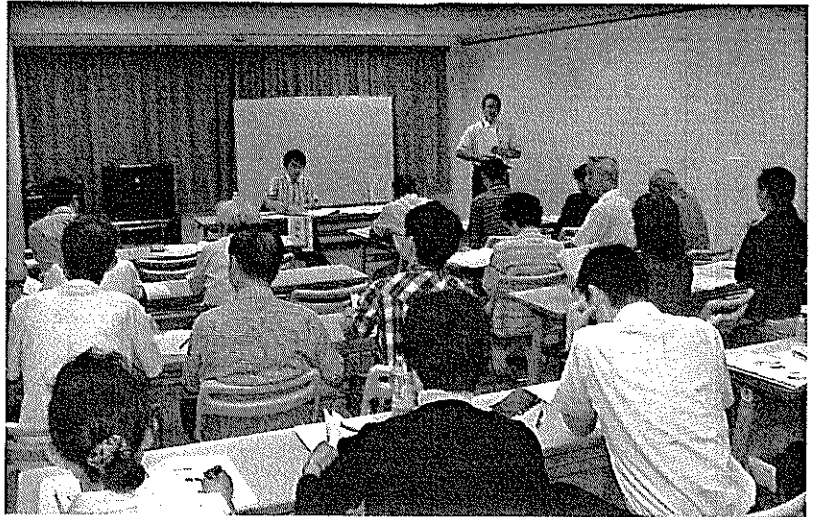


人と人をつなぐ会でのサロンのようす

ひとり暮らし高齢者の孤独死の増加を受け、2007年11月に戸山団地の住民らを中心に法人設立。高齢者世帯や一人暮らしの世帯に機器を設置しコールセンターと結んで、毎日の安否確認や、高齢者の話し相手、暮らしのネットワークづくりの提案活動などを通じて独居高齢者の生活支援に取り組んでいる。

代表理事の本庄有由さんは戸山団地の住民で、今回の調査にも住民として関わった。

「2006年に新宿区が孤独死対策事業を始めた時に、はじめて自分の住む団地で孤独死が続出していることを知って驚いた。どうにかしなければと思いこの活動を立ち上げた。日頃の相談活動を通じて感じるのは、困ったことがあってもそれを訴えることができない高齢者が団地にはたくさんいるということ。そうした声に耳を傾け、代弁する活動をすすめたい」(本庄さん)



調査報告会のようす。区内10ヶ所で開催した。

調査報告会で聞かれた声 Aさん(区職員)

新宿区でも現在75歳以上の単身高齢者の訪問など、孤独死防止のための事業に取り組んでいるが、その発端となったのはやはり戸山団地の状況だった。この課題には、区も積極的に取り組んでいかなければならないという意識を持っている。戸山団地は、ある意味では行政の住宅施策によって「つくられたコミュニティ」。ハードの部分ではできあがったが、今後は人々のつながりとしてのコミュニティをいかに形成していくのが課題だと思ふ。

区の高齢者福祉施策としては、部屋に閉じこもっている高齢者や住民に外に出てきてもらうような働きかけが必要だと感じている。現在もサロン活動や花壇クラブなどの取り組みが行われているが、そこにプラスする形でさらにコミュニティ形成につながるプログラムを考えていきたい。今回の調査では「団地内に頼りにできる

人がいる」という回答が一定数あり、その点はほっとした。これはおそらく、昔からすんでいる住民同士のつながりがまだまだ残っているということではないかと思う。その意味では、新たに入居してきた住民同士のつながりやコミュニティ意識づくりの働きかけが大切だと考える。

Bさん(町内会役員)

地域コミュニティのつながりづくりに関しては、外国の例も参考にしていくべきでないか。ドイツでは、区報の配布を主婦を主力とした住民たちが一軒一軒自分たちでやっている。それが住民同士の日常的なつながりづくりにつながる。新宿区は新聞折り込みの方法をとっているが、新聞を取っていない人もおり、情報も十分届いていない現状もあるのではないかと。

Cさん(戸山団地住民)

暮らしのうるおいという面では、まちなかに緑を増やしていくことも大切。戸山団地でも花壇クラブ等の取り組みが細々と行われているが、建て替えによってかなり周辺の敷地内の緑が減少した。スペースは十分にあるので、現在は舗装されている部分も含めて今後緑を増やしていくことを検討してもらいたい。取り組みを住民の手ですすめることで、コミュニティづくりにも役立つはず。

取材・文 菅野道生

(東京ボランティア・市民活動センター)

*1 東京都の平均世帯人員数は、他の道府県にさきかけて、2025年に2人未満となることが推測されているが、新宿は1992年にすでに2人を切り、2008年9月現在1.7人まで減少している。(新宿区社協作成資料より)